

俳諧古今抄

再撰貞享
日之一

~ 5
922
1



利
號 922
卷 1

排
寫
之
包
鈔



早川藏書

明治廿八年
一月廿八日

利

家類圖



他譜古今抄巻之上

物心序

蓮二之序

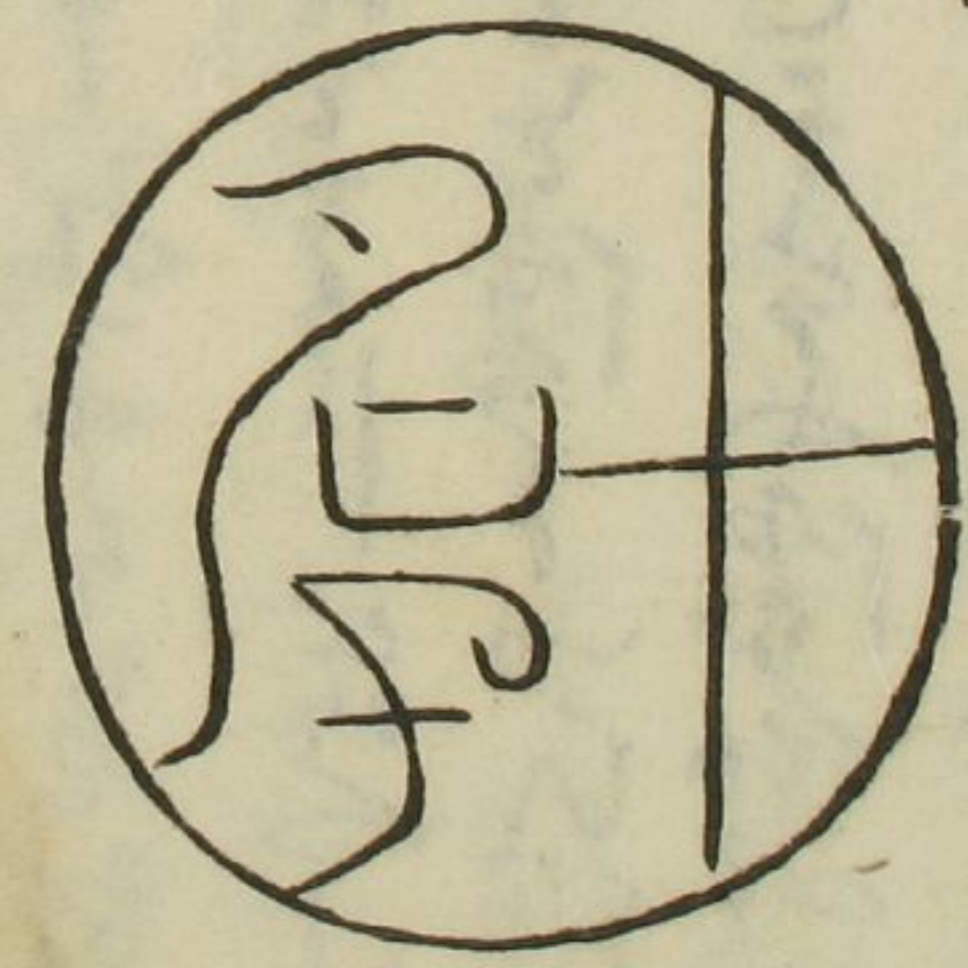


今以他譜古今抄巻之上
 一 漢之司馬遷史記
 一 滑稽首此子と註
 一 孔内の六秘に名とあり
 一 訓諫の二道と併く
 一 素原の諫名とし名と
 一 稱一滑稽首の女改能譜の
 一 一と云ふ千疑一決
 の抄文あり
 一 儒師を弄のし
 一 一と分れて諫
 一 一と家の秘法あり
 一 一と名を
 一 一と名を
 一 一と名を

古今類聚

一 臣の私とりぬらんかまはるる家園のいん
せむし石さの鏡れ面らよ神と談笑ん先
おひあふるの林れじよあそん破の所れ
いんて休諧のこふれおく存らん

吉子保巳酉之月吉祥日



古今抄凡例

- 一 此抄ニ〇合^イ按^スト祖翁ノ用捨ナリ且下ニ新古ノ
遠同ク考ヘシ△再^フ撰^スト先師ノ監察ホシテ△^ニ授^ス
ト八蓮ニカ拾遺ナリニ只今ノ相教ニ知ヘシ
- 一 此抄ニ衆評ト衆議ト明監ト之段ノ差別アル法ニ
支配ノ輕重アル座ト云ク一廿ト云ク百廿ト云ク
總テ、新古ノ決論ニ百慮一失ノ辞宜ト知ヘシ
- 一 此抄ノ省法ノ下ニ或ハ家語ノ詞ヲ假テ實ニ字ヲ
云ル制度ニ時代ノ垂テ云ク或ハ用ル其ハ人ノ自在

三テ用オハ其人ノ不自在トハ今式ニ人ヲ弘明セス抄
 古凡ノ偏屈ヲ山明トナリ或ハ先師ノ再撰ト下ニ如
 如是トハ弘經ノ如是我聞ニ滅後ニ再撰ノ折言語ナリ
 一 此抄ニ證句ヲ奉ルニ系ヲ定テ各乗ナキハ總テ祖翁
 ノ證句ナリ系ヲ定メスハ此印ヲ書テ直ニ送書トナリ
 多ハ先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其各アリ
 一 此抄ヲ里園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ然レテ文字
 ノ傍ニ隔テ白園ノ印ハ或ハ切字ノ節目ト知ヘク
 或ハ對語ノ相致ト知ヘク或ハ段ノ要文ト知ヘシ
 一 此抄ニ古式トハ多ク連テ兩式ヲ指シ古抄トハ貞徳ノ

佛筆ヨリ埋木噓州ノ類トト一部ニ埋木ノ名ヲ指
 カル師資ノ辭讓ヲ安ホスヘキナリ或ハ稀ニ本式ト
 云ルハ今ノ貞吉子式ノ本文ヲ指テナリ
 一 此抄ニ異名異躰トハ或ハ牡丹ヲ深見草トハ異名
 ナリ牡丹餅トハ異躰ナリ或ハ音訓ノ差別トハ自雲
 シシララモト云フモ各異ニシテ躰ハ同シ此故ニ異名
 一 下云ク異躰トト云ル今式ト古抄ノ透用ト商條
 ノ古法ト下ニ悉知スヘシ

古抄卷

貞享式目録

大段は本式ノ目録ナリ
小段は再撰ノ附録ナリ

一 俳諧と誹諧ノ字論也事

一 他諧と諷諫の道ある事

一 六義ノ今の和訓也事

一 冬段句ノ切字せる所ある事

附 心切めり 中切めり

附 挨拶切めり

一 切ノ之位の差ふある事

附 二字切めり 二字切めり

附 三段切めり 二段切めり

一 心切人多るるある事

附 とほり〜の事 子ほり〜の事

附 大廻めり 去お切めり

一 押字と抱字也事

附 句讀切めり

附 無名切めり

一 二語のうふれ事

附 浮裁めり

額哉のり

一 二のりやのり此事

附 二のりのり

一 二のりのり

ら。此のりのり

一 百韻、表八句此事

附 發句、仲のり、服、籠子のり

才、二、手、余、波、のり、可、可、句、の、終、のり

一 四折、曲、節、地、此、事

附 転向、句、作、のり

撰集、のり、秘、のり

一 月、花、此、事

一 指、合、と、去、嫌、此、事

一 意、向、此、事

一 季、節、の、跨、る、物、此、事

附 二季、三季、四季、のり、のり、物、のり

夏、の、三季、のり、向、去、ま、く、や、のり

一 季、と、ある、新、と、ある、物、此、事

一 各、取、入、雜、の、發、向、此、事

附 新、躰、のり、のり、四季、格、のり、のり

詠、階、のり、のり

不自在なりと云ふ一はぬ一は式とひそくに此前の
二と子と云ふ一は彼子御筆より嘯州の二と子
と云ふもんと云ふと控へんと云ふなり耳目の
公なるもんと云ふ取捨一と子の私あぐ今一や一程此
實証より近く一世の實証と實証の遠く百世
の的也よるも今一天竺の冥合と云ふ一もや
と云ふ一知の授記一と云ふは式めあといふも
は式めあといふ一と云ふ命

貞享五年辰子孟春如喜意日

再撰貞享子式

○俳諧と俳諧と字論此事

むらり俳諧と俳諧とと和歌の家と字論
あれと彼と史記の素隠し滑稽音獨俳諧と云
惟ちり俳文ありといふははく此俳林と俳諧の所は
いかに一と云ふと我々の中じ一延在の御代此
古今集よりけり俳諧の二と子と云ふ一和歌の二解
と云ふより拾遺集よりたれ二と子と用ゆん漢一
同名の他諧ちりや俳と別名の俳諧ちりや古集

古今集

三

一 歌假名をなれいさるもまゝなむかひ世にひら
て誹諧ハヤヒくしよとまれいさる一う以雅の故を
きりりらとあうハをほおと主解九ふり
一う俳諧ハヤヒ二う誹諧ヒカヒ三う俳諧ハヤヒ四う滑稽カウキ五
法輔の奥後おしよめて宗祇のまゝまゝと誹ハ
甫尾切しう誹ハ胡管切とあれハ他諧と誹諧を
ふる各う誹諧の非比あるとふのまゝなれいさる
より代く誹の字と用いさるハ非比切より
てなとあふとふなれいさるハ對しハ實験を
うけなれとるの秘訣といひハ所詮ハおま

とくこせつ

東巻云△再撰スエもつたけはほとく人偏の
俳ハヤヒ字ハヤヒしつ一一家建まのまじとんかれと
矯カウキ世憤俗ハヤヒとくまな名の書ハ過當とけり
て他ハハ実験をまじとくハ例ハ我々の
遜言ちりせとくハ一ハ論より連言ハ或同
かゞと誹諧の名と増減ハ今の俳諧ハ
畜用とるハ一ハ同大異の故とまじハんた
ふるくハ他諧の遊戯ちりとまじハんた
誹諧の空戯ちりとあそれハ中右の誹おの用

東巻

誹

と申用と申しつゝは自ら身守りてはたしな
まひしむと申すことなれば世の事
はつゝ

○他語と諷諫の通あり事

天地と云はれしをて後天なるありて遠
くよめてけりぬと人々とてをりきりしと人向
の私よりる事と此物の中よりあつて善なること
悪なることありと釈迦と云へしとて未だ未だ
とて好むれども世とてはたしなむとて

此の世に揚墨の事ありてはつゝは世の術の
るくすくす世の事と云ふ事とてはたしなむ
の以てありと人向の世とてはたしなむ
中より他語の事とてはたしなむとてはたしなむ
用事とてはたしなむとてはたしなむとてはたしなむ
とてはたしなむとてはたしなむとてはたしなむ
るありてはたしなむとてはたしなむとてはたしなむ
道に在る事の高き事とてはたしなむとてはたしなむ
とてはたしなむとてはたしなむとてはたしなむ
法とありてはたしなむとてはたしなむとてはたしなむ

のて敵れ少くされ直諫の人は此の世に乏しき
しある人の心の中にも少くあるものなれど他者の
るべきを治國齊家の一助として忠告として
又倫とやうきこと儒術の大なるものなり
一もことなきに諷諫あり一も者にあつては
琴の正諫の明節明節不可久安也故
諷諫の取容とて世賢の諷諫の内秘とて
世賢の諷諫の外現とて一も諷諫と云はれ
くことありしとて今も他者の諷諫に
一もことなきに高遠の風にあつて敏捷の知

はのりてたゞい者相に州の事とて一言の下は着彼
一も歌人連音に揖讓とありて一も建物の
一も地をうへる虚々のしとて一も時とありて
此れ人知とありて一もねむりの合用とあり
原壤の夷此れ此れ言ふ類回の樂此れ其詞と一分八句
のやういふあもやとて一も百人のあつては
一も此岸のあつては一もあつては川を渡る
一もやまを命とて道の極とて一も能くは
一もことありて此れ自證とありて一も子に
一もことありて他者の高下此れ媒とありて一も運歌と

わさねと詭譎かひらき五七此句法と言語の
ありはうて例の詭譎より公道とあり例此
詭譎より公道とあり一先より秋の連る
不し一或月と世く此無誤よりある也

東老云け一語の要文と傳仙の此は遠と
詭一孫老の人此高舉と詭一能言と
世此の随一とあるはことと連門のきと
ついで下字と連の用ついで文章此虚の文
うに詭破まへ一はさうありこれの大言
孫子の虚詭の事と此は此の似あり天道

の夫とくまうり人道の下と此をまへさるん
虚の文の虚の文と此はさうありはありま
能言の様をまへ一はさうありと能言の

高舉あり

○六義我今之和訓此事

詩言に六美とありと此は六義とあり
我ありは在と集しひるなりと連言七能言と
その跡とあり以賦比興の能言とあり毛詩の
各目より一凡能言と解とあり賦比興と解と

ちるるに詩の所義此河法ありとせしむるは
 六美の後に和漢とに今めあはれしむるは
 古語もあはれしむるは種^分とせしむるは
 ことつらうとせしむるは六美とせしむるは
 ちのちとせしむるは此河法ありとせしむるは
 てあめ和之とありせしむるは連音とせしむるは
 の的とありしむるは或や昔時此河法ありとせしむるは
 推号と此河法とありしむるは○今按とるは六美^分此
 差ふると凡推頌の之種とて世間の人即と議論
 園畦と哀楽ととてありしむるは○今按とるは六美^分此

とせしむるは此河法ありとせしむるは
 一論語と文質とありしむるは○今按とるは六美^分此
 各とありしむるは○今按とるは六美^分此
 の凡世とありしむるは○今按とるは六美^分此
 い王を此のありしむるは○今按とるは六美^分此
 ちるるに詩の所義此河法ありとせしむるは
 二用とるは○今按とるは六美^分此
 とありしむるは○今按とるは六美^分此
 六美の後に和漢とに今めあはれしむるは
 古語もあはれしむるは種^分とせしむるは
 ことつらうとせしむるは六美とせしむるは
 ちのちとせしむるは此河法ありとせしむるは
 てあめ和之とありせしむるは連音とせしむるは
 の的とありしむるは或や昔時此河法ありとせしむるは
 推号と此河法とありしむるは○今按とるは六美^分此
 差ふると凡推頌の之種とて世間の人即と議論
 園畦と哀楽ととてありしむるは○今按とるは六美^分此

中ありて先と我々の愛護しとる所

訓義我凡ハ詠諭ナリ多ハ言ト訓スレ和歌ニ
ハ副歌ト訓スレト比真ニ賦ニ知レシモ詩曰凡者

多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂
其情周南召南親被文王之化ニ今何為凡詩

之正經云然ハ其国其人ノ凡俗ノ善惡ハ凡謡ニ
依副テ多ク云ル故ニ凡化トモ註セシナリ○今按スルニ

凡化モ凡俗モ總テ詩歌ノ詠諫ニテ上所化曰凡
下所習曰俗トモ上ハ凡化下下ハ凡刺上トモ云レリ

何レモ時代ノ凡謡ニテ鎌倉名代ニ葛蒲ノ謡ヲ作りテ

其代ノ俗樂ヲ刺シ類ナリ○獨按スルニ我輩ノ訓

美ニ凡諭ノ二字ノ意ヲ連ヒテ諭言凡訓スキヤ

然ラハ俳諧ノ宗ト成セ凡諷諫ノ和モ叶フヘシカ

去レ凡名ノ大騷トハ此等ハ百世ノ明鑑ヲ待ヘシ

訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ多ハ正言ト訓スレ和歌

ニ直言歌ト訓スレト平話ノ徒言ニ紛レ又レシ

俣語ハ音訓ノ響ヲ悼ルヘシ○今按スルニ凡雅ノ二賦

ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虚ヲ以テ天ニ起リ雅

ハ實ヲ以テ地ニ止ル詩經ハ此ニ美ニ濫觴ニテ乾坤ノ

雅

ト見テ以之懲惡ノ虚ヲ用イ雅ニ勸善ノ入ヲ用
ハ雅ニ正直ノ意ヲ汲テ公言オホヤク氏訓オホヤクスキヤ此等
ハ異名同躰ノ例ニテ一也ノ要義ニ據ヘキナリ

頌

訓美ニ頌ハ稱ナリ美ナリ多ニ祝言ト訓スレ和歌
ニモ祝言ト訓レテ引歌モ給ル所ナレ然レ詩序
ニ雅頌ハ一躰ノ様トト雅ニ国家ノ諷諫ヲ含ヒ
頌ニ君父ノ壽量ヲ祝レテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ
此故ニ六美ノ引歌モ頌ノ躰ノ明ニテ且外互名
ハ給ハレ今按スレニモ詩ニモ雅頌ニ備朝廷郊廟
樂歌之詞其詔和而莊其美實而密正

賦

之於雅以大ニ其規和之於頌以要其止也
詩之入旨也然レ雅頌ノ二用ヌル外ニ在密
次ヲ備ヘテ諷諫ノ正直ヲ行ヘ内ハ和實ノ情
ヲ含ヒテ詩序ノ優美ヲ調ヘレ爰ヲ孔子ノ曰
給ル文王ノ文ニレテ孔子ヲ我家ノ大祖ト成昆白馬ノ
和節モ此謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
訓美ニ賦ハ鋪ナリ景ナリ爰ニ美言ト訓スレ和歌
ニモ美歌トアリ又選ノ本ヲ註モ多事明白也
ト云ル眼前ノ物ヲ美ニ並テ直地ニ次女情ヲ演ル
謂ナリ定哀婦ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

四季二月雪ノ姿相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物名ナリ

比

訓美ニ比比喻ナリ又ニ準言ト訓スヘシ和歌ニモ
準歌トアリ優花物比鳥トハ詩人歌人ノ優情
ヲ指テ鳥ニ木ニ物ヲ言ハス類ナリ或ハ韻書ニ
比字ヲ兼採キテ比比方於物鳥比托事於物比
云ヘリ○今按スルニ比ト鳥トハ姿情ニ先後ノ心得アリ
比ハ物ヲ取テ其姿ニ準テハ鳥ハ物ニ托テ其情ヲ起ス
物ヲ催スト物ニ催ルト自他ノ差別ヲ知ナリ也美ヲ
他語ノ微中比解紛比云キナリ

興

訓美ニ鳥ハ誘引美ナリ又ニ誘言ト訓セシ和歌
ニ喻事ト訓スレト凡比ニ訓ニ然ハシ然ハ鳥字
ト凡字ノ和訓ハ美ノ中ノ太騷シテ我内ノ愛護ハ
知是トト百世ノ明證ヲ恐ナリ○今按スルニ鳥ノ
一美ハ和歌トモニ今明ナラヌヤ去ハ論語ノ陽貨篇
ニ子路ニ詩經ノ風流ヲ勸テ詩以テ可興トハ四季
ノ月雪花鳥ニ誘テ優游ノ情ヲ興セトノ
謂ナリ然レテ例ノ朱註ニ發起志氣トノ
云捨レハ孔子ノ宜給フ似而非ナル物ニ興ハ
決シテ遊鳥ノ興ト註スレシ詩者人心之感

物ニ而形於言ニ之餘也トハ朱氏ノ詩序ニ云
十カラ何故ニ自詔相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニテ
文章ヲ後ニセシ論語一部ノ取違ニテ先後ハ例ノ
察スヘキナリ然レハ與ノ美ヲ以テ詩歌ノ大本ト

知キナリ

○發句と切字のなる理ある事

むしん切字のするを十八字の事ありて和歌も連歌
も此の法あれし例の所あるもそをなとあはね
いさし知の心持とせんとするやうなりて自ら分る

るやあつてまはし中古の能潜よりソらくの各同
あれとて今も連歌も此用とありけれは此能潜の
法すべし同所不用のきくひありしと一とせとく
切字の用とてやと物と對して互下の景色をねを
そととて時ととけり物を二ととるなり始あり終
ありて二句一章此發句ととあはれりなると切字の
用とてやと或と一字の備あるやのみよのみまはれと
とい或と雛初の助子とあはれしと此子むのみまは
れとてよとあはれ何誰とてとて哉来と休まはる
い迷とて懐り初りて静とてと物と對のるなり

ふとめくはまおしはまをうとら知あれし万代一現
の儒師の書しを月と物字のそららこまは
まうら古おのまうらしと式の中お一をいふて
ふれ世白とあくまをやまうらし

まくくにあのうと物と 唐書

まらおくなとと書お月の書

ふれおはゆの世白とらうらうまうら物字のそら
あさいふとととる世の物字あれまうら
ふれおはゆまうら一近く世白とるあつてや
はれし楊朱のうらあまうら書書うらあれらる

とまをうら各月の海ととそれの取捨とておの用
不用うらうら二子うらにけんとあつてと

東蒼云けうまうら湖南の邊程とありて前と
まうらの唐書とと色とと秋のうらまを井と称
後らとと書お各月の各月と書とと書ととそれ
証證のまうらとゆりやあつてと書にまうら
ゆらと減はし再撰のたうらうらうら書とと書と
のゆりゆらうらとと書とと書とと書とと書と
ととまうらとと書とと書とと書とと書とと書と
まうらとと書とと書とと書とと書とと書と

いふにわて千六の歳をばあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは

いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは
いふにわとあけあつらふ事なるは

とにくりたりや△再撰まらんけけと和歌のし
 我あしあくふ。めいしきく或るらひせりしとの
 いまきふとせまりしと通例あれし今廿二章
 いとのあしり切りし切りもあつれしけり
 拍字より射回のこ集とあるまはせとわい
 の曲字とやいふ事かけけの地とあつりしを
 初名の事といひしつてあつれしとあつりしを
 此の事より例し通例のまうとあつりしを
 し今世あつりしとあつりしとあつりし
 或る古本の各目は大廻りしとあつりしとあつりし

とあつりしとあつりしとあつりしとあつりしと
 云々の各にる玉當りり我家の或目とあつりしと
 ありしとあつりしとあつりしとあつりしと
 初字とらるく極むしとあつりしとあつりしと
 いありしとあつりしとあつりしとあつりしと
 の各ありしとあつりしとあつりしとあつりしと
 此あつりしとあつりしとあつりしとあつりしと
 下極むしとあつりしとあつりしとあつりしと
 あつりしとあつりしとあつりしとあつりしと
 今世あつりしとあつりしとあつりしとあつりしと

まろし^一包^一と包く^一此^一差^一不^一あ^一む^一け^一る^一和歌^一が^一辨
り^一し^一有^一一^一部^一辨^一し^一見^一様^一辨^一し^一下^一の^一名^一あり
ま^一包^一あり^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一れ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
大^一廻^一し^一玄^一妙^一し^一ら^一切^一の^一柳^一は^一あ^一ん^一と^一東^一と^一名^一あり
句^一強^一ら^一む^一と^一あ^一る^一と^一包^一け^一ら^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
大^一ま^一り^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
不^一あ^一ら^一れ^一し^一名^一あり^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
一^一名^一同^一と^一一^一ら^一り^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
ま^一り^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
各^一同^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一

ふ^一切^一の^一ら^一り^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
は^一れ^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
あ^一れ^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
下^一は^一し^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
名^一あ^一る^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
東^一を^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
路^一あ^一る^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
神^一句^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
一^一名^一同^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一
孫^一と^一あ^一る^一と^一包^一さ^一る^一と^一包^一さ^一る^一

古抄の各回とあはさしとてまやねく滅ねて撰集
 の山嵐うみやまとてあはさるまゝとあはさるまゝとてあはさる
 所命のまゝとあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 て今此世向とあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 せりて西施の容色とあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 のも此世向とあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 まゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる

大廻 まゝのねとていへん勝と。
 ちまゝとあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる

まゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる

のまゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 もまゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 の勝とてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 一確然の難ありあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 面白からまゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 美と大まゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 のははあり次とてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 偶作とてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 と決まるとしてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる
 あはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさるまゝとてあはさる

おのよはけにきと誤るにんゆのいふ事あり
てん屋一りの中屋一り下屋をかた大ぬりせ
ちねしけしきとちの間の間ちりてきりて
さか或は月一ありあはちあはち或は夕日此春句
しとあはち或は秋日の春句しとあはち
ま春秋の朗誦しりあしはてあはちの事句
あはちあはちと詠嘆の余情と細くしり春句
ねし春句あはちしりねしちねしちあはちの
ゆししりあはちしりあはちしりあはちあはち
人のあはちあはちしりあはちしりあはちあはち

まその神ゆのあはちしりあはち△再探するんけ
ニをを信し古た各同とねしちあはち解を解
の詞とねしちあはちの或月あはちしりあはち編故
知新とまそのあはちのあはちとあはちしりあはち
一屋のまをあはちしりあはちしりあはちとあはち
のあはちしりあはちしりあはちしりあはち

白雲式及び一終

